

---

# 空を飛んだ姫

亜里紗

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

空を飛んだ姫

### 【コード】

N6884E

### 【作者名】

亜里紗

### 【あらすじ】

まだ1度も外に出た事の無い姫。星の助けで、外に出るが…。

ある城に、ユーラという一人のお姫様が住んでいました。そのユーラ姫は、一度も外に行つた事がありませんでした。ある夜のこと、ユーラ姫が空を見ながら言いました。「一度でいいから外の世界を見てみたいわ。大空の下で、走り回ってみたいわ。」すると、星がどンドン窓の外に集ってきました。その星は沢山集まり、お城の外へ行くための階段になりました。そして、一つの星が言いました。「ユーラ姫、どうぞお逃げ下さい。お城の外で、沢山遊んで下さい。」ユーラ姫は一歩足を前に出しましたが、すぐに引つめました。ユーラ姫は迷っていました。何故なら、ユーラ姫は来週大きな舞踏会が自分のお城で行われるからです。今日お城を出れば、舞踏会には間に合わないでしょう。それでもユーラ姫はお城の外に出たいという気持ちが大きくて、階段を一段一段おりて行きました。階段をおり終わった時、星が忠告しました。「ユーラ姫、二度とここに戻つて来てはいけません。いいですね？」すると姫が言いました。「私の城よ？どうしていけないの？」星はその質問に、こう答えました。「姫が戻つた時、姫は一生外へは出られなくなってしまうのです。」それを聞いた姫は、星にお礼を言つて真っ直ぐ走り出しました。森を走っていたユーラ姫は、疲れてしまいました。すると、ユーラ姫は切り株を見つけました。「あら、こんな所に切り株があったわ！」ユーラ姫はその切り株に座り、そのまま目を閉じました。森の風を子守歌とし、夢の中に落ちていきました。ユーラ姫が眠つた頃、一人の王子が現れました。「大丈夫ですか？」王子が話し掛けても返事がないので、王子はユーラ姫と一緒に馬へ乗せ自分の城へ向かいました。ユーラ姫が起きると、そこは森の中ではなく、綺麗なベッドの上でした。「ここはどこなの？」辺りを見回し、ユーラ姫はベッドから降りようと思いました。その時、男の人の声がしました。「もう少し休んでいるといい。」声のした方を見ると、白い

タキシードを着た男の人がありました。「あなたは誰なの？」ユーラ姫はベッドに座りながら男の人にそう質問しました。「僕はこの国の王子、マロンです。」「マロン？この国の王子って事は、私はあの国から出られたのね！」ユーラ姫はマロン王子の目の前に行き、お礼を言いました。「マロン王子、ありがとうございます。」「何がです？」「あの国から私を逃がして下さったのです。」「ユーラ姫がそう言うのと、マロン王子は首を傾げました。「貴女の名前は、何ですか？」「私はユーラですわ。」「ユーラ姫？」「マロン王子は驚いた顔をしました。来週、隣の国のお城で行なわれる舞踏会の主催が、ユーラ姫の父親だったのです。」「どうかなさいましたか？」「いいえ。」「マロン王子は迷いました。この事を言うべきか、言わないべきか。結果、言わない事にしました。マロン王子は、ユーラ姫に一目惚れをしてしまったのです。なので、ユーラ姫をずっと傍に置いておきたかったのです。」「マロン王子？」「朝食がまだでしたね、どうぞ付いて来て下さい。」「はい。」「ユーラ姫はベッドから降り、マロン王子の後を付いて行きました。少し歩くと、大きな机が見えてきました。」「そこに座ると良い、ユーラ姫。」「はい。」「ユーラ姫とマロン王子は、向かい合うように座りました。」「ユーラ姫、貴女はどうして森の中に居たのですか？」「マロン王子がそう質問すると、ユーラ姫はこう答えました。「私はお城を出て逃げていた途中なのです。」「でわ、どうして逃げたのです？」「するとユーラ姫は、黙り込んでしまいました。」「ユーラ姫？」「私は、一度も外に出た事がなかったんです。」「ユーラ姫はそれ以上何も話さず、ご飯を次々と口に入れていきました。食べ終わると、マロン王子が言いました。「外で遊びませんか？馬に乗ったり、走り回ったり。どうですか？」「いいのですか？」「はい！」「ユーラ姫は喜びました。やっとユーラ姫の願いが叶う時が来たのです。庭に出ると、馬が一頭いました。「これは何？」「馬ですよ。乗ってみますか？」「はい。」「ユーラ姫を前に、マロン王子は後ろに乗りました。馬が動くと、ユーラ姫は喜びました。初めてだったのです。」「マロン王

子、私は走ってみたいです。「走る?」「はい。」「ユーラ姫がそう言つと、マロン王子はユーラ姫を馬から降ろしてくれました。「走りましょう。」「はい」「ユーラ姫は庭をずっと走っていました。回つたり、ジャンプしたり。」「ユーラ姫、疲れたでしょう?少し休みましょう。」「はい。」「ずっと走り回っていたのです。ユーラ姫がベッドで眠ると、マロン王子は大広間に行きました。」「ユーラ姫は僕の事を何とっているのでしょうか。」「誰もいない大広間、マロン王子の声だけが響き渡ります。すると、どうでしょう。天井から何かがやって来たのです。」「誰だ!」「私は女神です。もうすぐユーラ姫の家来がやって来ます。早く、早くユーラ姫を。」「マロン王子は驚きました。羽の付いた女の人が話したからです。」「早く、ユーラ姫を安全な所に。」「分かりました。」「マロン王子は眠っているユーラ姫と地下の部屋に一緒に入りました。」「きつとここなら大丈夫だ。」「マロン王子は内側から鍵をかけ、絶対に入れないようにしました。すると、声が聞こえてきました。」「姫は何処だ!ユーラ姫を何処へやった!」「ユーラ姫の家来です。ユーラ姫はその声で目を覚ましました。」「ユーラ姫、貴女を助けたいと思います。」「はい。あの、私。」「どうかなさいましたか?」「王子がそう聞いても、ユーラ姫は何も話しません。」「あの、マロン王子。」「はい。」「私。」「ユーラ姫が言いかけると、扉の場所が見つかってしまいました。」「長官、こんな所に扉が!」「扉だと?」「家来達がこちらに近付いて来るではありませんか。簡単に鍵を解かれ、ユーラ姫を奪われてしまいました。」「ユーラ姫!」「マロン王子!」「ユーラ姫は家来達にお城に連れて行かれました。」「マロン王子。」「ユーラ姫はずっとお城に着くまで、そう呟いていました。一方マロン王子は、自分の部屋に籠っていました。」「僕のせいだ。僕がもっと警戒していれば。」「マロン王子はずっと後悔していました。すると、さっきの女神が出て来ました。」「マロン、来週会えるではありませんか?」「ですが。」「大丈夫です、来週まで待ちましょう。」「マロン王子は少し考え、それから返事をしました。」「はい、来週まで待とうと

思います。「マロン王子の返事を聞くと、女神は消えていきました。舞踏会前日、ユーラ姫は困っていました。ユーラ姫の父親が婚約者のドール王子を連れて来たのです。「お父様、私はもうお慕いしているお方がいるのです。「それは誰だ!」「言えません。「ユーラ姫には、お慕いしている方がいるのです。なのでユーラ姫は、婚約者などいらなかったのです。「ユーラ、結婚の正式発表は舞踏会だからな!」ユーラ姫はそこから逃げるように自分の部屋には入りました。「誰も私の気持ちを分かってくれないわ」ユーラ姫はずっと泣き続けました。「外に出たいわ。外に出させて」ユーラ姫はどうしても外に出て、マロン王子に言う事がありました。どうしても、言わなければいけないのです。マロン王子は、明日の舞踏会に向けてお城を出ました。「ユーラ姫。「馬を走らせ、家来達と共にユーラ姫のお城へ向かいました。そして、舞踏会当日。「皆さん、来て下さってありがとうございます。「舞踏会には沢山の人が集まりました。勿論、マロン王子もです。「でわここで、娘を紹介したいと思います。ユーラです。「拍手の中、ユーラ姫の手を引いてドール王子が現れました。「正式に、娘のユーラと、ドール王子の結婚を発表します。「マロン王子は驚き、声も出ませんでした。しかし、我に返るとすぐに声を張り上げました。「ユーラ姫!僕と結婚して下さいますか?」ユーラ姫はマロン王子が居た事に驚きました。「ユーラ姫!返事を下さい!」ユーラ姫は黙り込んでしまいました。そして、階段をいっきに降りたのです。「結婚して下さい。「はい!」二人は手を繋ぎ、お城を出ました。「どうぞ、乗して下さい。家来達が追って来ます。「どうしましょう。「まずは、落ち着こう。「マロン王子は、もうユーラ姫と別れたくないのです。「ユーラ姫、僕は貴女に言いたい事がある。「何でしょうか?」深呼吸をして、マロン王子は言いました。「好きです。「私も!私も、マロン王子をお慕いしております。「やっと気持ちが繋がりましたが、家来達はどんどん近付いてきます。「マロン王子、私はず

つと一緒にいたいです。」「ユーラ姫。」「マロン王子は考えました。すると、ユーラ姫が言いました。「死ぬ時も、一緒ですよ?」「ユーラ姫は分かっていたのです。一つしか方法は無いのです。」「ユーラ姫、本当に良いのですね?」「はい」「後悔しませんか?」「はい」「でわ、どうぞ」「マロン王子はユーラ姫に手を差し出しました。ユーラ姫は、その手を取りました。二人が見つめ合っている時、家来が来ました。「見つけたぞ!」その声と同時に、マロン王子とユーラ姫は身を投げ出しました。落ちる途中ユーラ姫が光り、大きな羽根が見えました。「これは、あの女神と一緒にだ。」「ユーラ姫は、女神の子供だったのです。」「一緒に、行きましよう?」「マロン王子が頷くと、空高く上っていきました。二人は星になり、ずっと一緒にしました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6884e/>

---

空を飛んだ姫

2009年6月29日19時18分発行